

小梅は嘉永七年の東南海地震を記録していた

紀州藩校学習館の^{とくがく}督学（学長）、川合梅所の妻で『小梅日記』（以下『日記』という）の著者として知られている川合小梅は『日記』のほかにも多数の『雑記』を残していたことは以前にご紹介しましたが、それらの中に明治十年（一八七七）に記録したことになっている『雑記^{いりませ}入交』と題された一冊があります。その冒頭に上に掲げた、一文があるのを発見しました。

現在、私たちが目にできる『日記』は天保八年（一八三七）から明治一八年（一八八五）までの約五〇年間の内の十六年分（『和歌山県史 史料編三』及び『東洋文庫』256・268・284）のものですが、昭和十四年十一月に県立図書館で展覧された際のもものは、天保十三・弘化四・嘉永二・四・五・六・安政四・七・万延元・文久三・慶応二年のものでした。前掲のものと一緒に併せてみると二六年分が残存していたことにはなりますが、それらの中にも嘉永七年（一八五四、十一月二七日「安政」と改元）の『日記』は含まれていません。

実はこの年の十一月四日から六日まで駿河・遠江・伊豆・相模を中心に死者一万人余りを出す大地震・津波が発生しています。いわゆる「安政の大地震」と呼ばれる地震群の一つです。

小梅によるこの記録は、その地震群の中でも非常に多くの記録が残されている「安政の東南海地震」の記録ですが、他のもののほとんどが半ば公的な記録であったり、後からの懐旧談であるのに対して、これはまさに、ほぼ同時に記されたものであり、その規模の大きさと小梅自身の心理の動きまでをなまなましく伝えており、本当に臨場感にあふれた記録であり、非常に貴重なものと言えます。

関東の大地震も余震が続いたことがさまざまな史料に見られますが、『田辺町大帳』によっても、この地震のすさまじさが手に取るように分かる記録が残されています。

ただ、この記録は十一月四日から六日までの惨状を克明に記していますが、通常の『日記』に記されるその日の天候に関する記号が見えないことから、これは何等かの理由から小梅自身が嘉永七年の『日記』から抜き出したものとは考えられません。ということは、嘉永七年の『日記』は明治十年時点ではまだ残っていたということになります。このことも新しい発見であります。

（文責：当館主幹 須山 高明）